



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

今年の市民文化祭は、どのイベントに行っても本当に賑わいがありました。映画にお芝居、展覧会。合唱祭、発表会、コンサート。ミュージックストリートにおでん祭り・ソウルフード・六斎市も凄い人でした。まちなか市場、清閑亭や松永記念館もいつも賑わいがありホッとします。旧片浦中のアート、松永記念館の成川美術館名作展も見応えがありました。「日本を元気にしたい」「小田原を元気にするんだ」3,11以降日本人はみんな自分の思いを色々な形で表現しているのかもしれませんが。やはり小田原には文化の土壌がある、文化の層が厚いと感じます。おだわらミュージアムプロジェクトと市の協働企画「長谷川澁二郎展」は来年1月の予定です。多くの協賛者に力を頂きながら、アートの力を信じてラストスパートしていきます。

新九郎 11月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 11/2(水)~11/7(月) 第2回襟会木版画展	モットー“和を持って木版画を楽しむ” 13名約50点の展示
 11/9(水)~14(月) ラ・パレット油絵展	空間の描き方、間のとり方で絵は表情をかえる 指導：指原いく子先生
 11/10(木) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円
 11/16(水)-20(月) 書学会翠会書藝展	児童から大人までの書道教室作品展、篆刻の実演もあり。 指導：下田翠雨先生
 11/23(水)-28(月) 円居会作陶展	足柄の里・円居窯に集う陶芸教室の作品展。織部、白磁 指導：西静恵先生
 11/30(水)~12/5(月) 開成游刻会展	南足柄市、開成町、伊勢原市 秦野市、大井町から集ったメンバーの刻字・篆刻の同好会

会期・展覧会名	会場
11/2(水)~7(月) やまぼうし工芸展	飛鳥画廊 0465-24-2411
11/3(木)~7(月) 足柄刺繍・山野草、茶花展	アオキ画廊 0465-23-5624
11/10(木)~14(月) 第11回水彩画クラブ展	アオキ画廊 0465-23-5624
11/2(水)~7(月) 石渡武夫木版画展	お堀端画廊 0465-23-7819
11/9(水)~14(月) グループ・アトリエ展	お堀端画廊 0465-23-7819
11/3(木)~7(月) 井上高久個展	ツノダ画廊 0465-22-4250
11/24(木)~28(月) 豊田幸夫創作展	ツノダ画廊 0465-22-4250
11/1(火)~13(日) 松田英展	すどう美術館 0465-36-0740
11/1(火)~13(日) 一森京子展	すどう美術館 0465-36-0740
11/18(金)~12/4(日)火曜休館 アーティストインレジデンス	清閑亭 0465-22-2834
10/22(土)~11/20(日) 成川美術館名作展	松永記念館 0465-23-1377 郷土文化館
11/16(水)~21(月) 広川英夫個展	ギャラリー東海岸(茅ヶ崎) 0467-83-8887
11/1(火)~2012/1/10(火) 広瀬玲子個展	ナラヤカフェギャラリー 0460-82-1259 水第4木休
11/15(火)~20(日) 石井佐一回顧展	松田町民文化センター 0465-83-7021

小田原怪獣散歩

若林寧人

子供の頃から大好きな怪獣で、大好きな故郷小田原の名所や風景を紹介するイラストシリーズ



延宝年間に銅門に現れた物の怪については『足柄怪異譚輯録』に詳しい。「赫々たるまなこの大きなされこうべあらはれ」登城する藩士らを襲ったという。中には勇敢にも切りかかった者がいたが、「太刀はただ空を切るばかりにてあへなし」と歯が立たなかった。藩主稲葉正則の依頼により最乗寺のさる高名な修験者が対峙したところ、大野某という「大久保長安事件」に連座した者の祟りであると断じた。この事件は2代藩主大久保忠隣改易の原因にもなったものである。すぐに城をあげての加持祈禱が行われその後、物の怪は現れなくなった。この事が大久保家が忠朝の時に小田原藩主として復帰を果たす遠因にもなったという・・・のは、もちろん全部私の作り話。

延宝年間に銅門に現れた物の怪については『足柄怪異譚輯録』に詳しい。「赫々たるまなこの大きなされこうべあらはれ」登城する藩士らを襲ったという。中には勇敢にも切りか

小田原市 松永記念館交流美術展 箱根・芦ノ湖 成川美術館名作展

岡信孝・高山辰雄・平山郁夫・堀文子・牧進・山本丘人・吉田善彦



会期 2011年10月22日(土)~11月20日(日)
 時間 9:00~17:00
 会場 松永記念館本館・別館展示室
 観覧料 一般 500円/大学生・高校生 300円
 主催 小田原市郷土文化館(0465-23-1377)

第16回アトリエ訪問

西静恵 陶芸 南足柄市在



緑豊かな大雄山の参道入り口、「円居窯(まろいがま)」は仁王門のすぐ脇にあった。二間続きの広々とした工房には制作中の作品が沢山置かれ、展示会前の活気がみなぎっていた。窯場には大小2つの窯。工場で使うような大きな窯には展示会の仕上げに入っているのか火が入っていた。

西さんは石川県の小松市、あの九谷焼のお膝元で生まれた。古九谷の絵付け師をしている祖父の仕事を幼い頃から観て育った。この道歩くことはDNAに組み込まれていたのかもしれない。陶芸は瀬戸で学んだ。日本に2校しかない陶芸の職業訓練校愛知県立高等専門学校で、基礎からみっちり学んだ。休みは旅に出て食と器を楽しみ、土地の窯元を訪ねて歩くという陶芸漬けの生活は、独り立ちして23年たった今も変わってはいない。

『求める者に道は開ける』西さんにもその出会いが来た。卒業後、唐九郎の窯で下働きをしていた御殿場の窯元で修業をした。決して教えてなどもらえない厳しい作家の世界で修業を積んだ。下働きだけの2年そして釉薬の調合や窯入れ窯出し、唐九郎の作った薪窯も経験できた。頭で学んだ事を体を通し実践を通して学べた貴重な5年があって今の自分があると振り返る。

お話を伺った和室には、今までの作品が並びゆったりとした空間になっている。西さんと言うと緑や黒の「織部」の印象が強いが、若い頃は李朝の白に惹かれたという。ゆっくり拝見している作品の幅の広さと、チャレンジされてきた作家の姿が見えてきた。織部の緑、優しい黒、薄茶に乳白、青の縞の染付など、まるで自然の中にあるような心地よい

色の世界に気持ちが落ち着いてくる。日常使いの器から遊び心のある花入れ、オブジェのような陶器など観ているだけでも楽しい世界だ。ちょっと意外な作品があった。李朝を思わせる乳白色の大きな壺に文字が描かれた作品だ。「遊んだ」と言われたこの壺の字は、「良寛の書」を西さんが篆書に起こし書いたものだという。壺の面にこれだけの文字を書かれる書の腕前にも恐れ入ったが「良寛」を学び続けている事にも興味が沸いた。

良寛といえば常に子どもと遊ぶ優しい姿を浮かべるが、西さんによれば芯の通った自分の世界を曲げない人であったという。部屋には良寛の書「天上大風」が掛けられ、その細く力の抜けた柔らかな筆に見入ってしまった。お話をうかがいながら西さんの優しいまなざしと柔和な笑顔にすっかり魅了されてしまったが、そんな西さんにも心の迷いや横道にそれてしまいうようなこともあるのだという。作家としての気負い、作品をよく見せようという心が働くような時、良寛の世界を観ると落ち着き力が抜けるのだと伺った。



4度の引っ越しの末落ちついた大雄山には不思議なご縁を感じていると言う。独立後、初めて注文の作品を納めたのが大雄山最乗寺の山主の記念品の湯飲みだったという。故郷の小松も寺院が多く仏様を観て育った西さんには自然豊かで寺が近くにある大雄山は落ち着く第二の故郷になっている。

窯から出てきた作品の中に時として作為を越えた作品が出来上がることがあるという。その一つ、窯から出てきたあと3日間興奮し

て眠れなかったという貴重な茶碗でお茶を立ててくださった。自然なゆるみ、手にぴったりと吸いつくようになじむ感触。最後の一滴まで気持ちよく体に注がれる縁、裏を拝見すると、すっと一筋の釉が高台にかかるとして留っていて美しい。作為を越えたとは言っても、この茶碗は決して偶然生まれたものではなく、西さんのこだわりから生まれたものだ。

土は故郷小松の土、釉薬は大雄山のクヌギの葉の灰で削ったあめ釉と南足柄のわら灰、すべて自作の妥協のない素材を使った。この何とも言えないたわみを作ったのは火の力だ。そしてそれを引き出したのが釉の加減だと教わった。実に奥の深い道である。茶碗の正面は柔らかに曲がり西さんの目指す「味」のある茶碗でいただいた一服は私にとっても贅沢な貴重なひと時だった。

「円居窯」では月2回「よく遊びよく作る」教室が開かれている。「生活を楽しむ」をモットーに生活を潤す作品を作っている。中には丸1日かけて制作に横浜から通っている生徒さんもいるらしい。作った作品に料理を盛り生徒さんと食べる機会も多い。生徒の作りたいたいものに近づけるよう学びながらサポートしているのだと謙虚な指導者でもある。

帰り際お忙しいにもかかわらず近くの里山を案内してくださった。参道の1本裏道を行くと、よく手入れのされた美しい里山になる。今では珍しい藁ぶき屋根の家は以前西さんが住んでいた工房だった。後2、3日でざる菊が辺りを彩り、紅葉の頃にはさぞ美しい事だろう。自然体の西さんにはこの自然がとてもよく似合う。

数を作っても上達する世界ではない。同じものを作ろうにもできることもない。「たわみ」「温かみ」「緩み」「味」作品の表情をこんな言葉で表す西さんの作品は円居窯展は11月23日から新九郎で出会える。

(新九郎友の会 木下和子)

●新九郎通信では9月号～12月号でOMP会員が「私の好きな溝二郎」として溝二郎の絵をご紹介します。

溝二郎の作品は、家に飾るのにちょうど良い大きさのものがほとんどです。きっと大きな美術館で眺めるのではなく身近に置いて楽しめることを大事にしたからでしょう。モチーフも身近な所にあるものばかりで、風景や静物が多いです。目の前にキャンバスを置き、最後の最後筆をおくまで現場で描いたと言われています。絵の前に立つと、その世界に閉じ込められてしまうような不思議な力があります。キャンバスのすみからすみまで丁寧に描かれている作品からは、作家の集中力、緊張感、息づかいまでが伝わってきて、目がぎ付きになります。素人の私には、到底絵になるとは思えないモチーフ「箱」を描いた絵に、目がとまりました。重なった大小の箱、ちょっとずらした置き方、影、画面上下のコントラスト、この絵は、箱が描いてあるのに箱を描いたのではないと感じました。目の前の何の変哲もない「はこ」の美しさを表しながら「絵とはこういうものだ」と伝える溝二郎の自信が見えた気がしました。72歳の時、溝二郎は歩行困難となりました。以外に出て描いた作品は消え「身の回りのありふれたもの」の中にある「美」を描き続けています。この「箱」はそんな溝二郎72歳の作品でした。



OMP 会員 木下和子

【10月のこと】

- 市民ホール検討委員会も徐々に意見がまとまってきた。大ホール1000～1200席、小ホール200～300席の固定席、マルチスペース兼リハーサル室。展示施設400㎡という流れになってきている。
- 西相展では高校生の部で高橋麻衣さんの作品が際立った。先の南足柄美術展で高校生として史上初めての市長賞を受賞した。美大志望と聞いた、楽しみである。
- イケムラレイコ展(東京国立近代美術館) 昨年栃木県立美術館のイノセンス展で小さなドローイングを見て惹かれた作家である。ドイツで活動するが、バルテュスを思わせる横たわる少女が妖しい強烈なイメージを見るものに与える。
- ASHIGARAアートプロジェクトでは、開成町酒匂川近くに空き工場が2か所あり、会場に提供するというプロジェクトに興味を持ち参加した。平屋と3階建であるがかなり広いスペースである。若い現代アートの作家を集めてできれば楽しいものができそうだ。Ⓧ



芸術家のアトリエの窓は、北側に設けて天空光を採り入れる。この作品の瓶に映る窓は、フェルメールの室内画に必ずある左側の窓のよう…青と緑、そして背景色に対応した黄色の差し色、光沢の有る甲板とマットな壁面、そのテーブルの水平線にシンクロした三本の瓶の背の高さ構図のバランスをわずかに崩すシガーパイプ、計算された色合いと構成、光を描く…というより、「空気」と「時間」を描いている

OMP 会員 瀬戸克信